

(財)交流協会 学生交流事業

日台青年映像交流事業（招聘）

交流協会では日本と台湾の青年交流を促進させるため、平成 22 年度日台青年映像交流事業を実施することとし、台湾の各大学の映画学科等で映像について学んでいる大学生を公募し、撮影企画書や撮影テーマ、大学で制作した作品などから選考した結果、大学生 3 グループ（各グループ 4 名計 12 名）を平成 22 年 9 月 21 日～9 月 30 日まで 9 泊 10 日の日程で日本に招聘しました。学生達は、撮影テーマに沿って受け入れ先である墨田区内にて撮影し、帰国後映像の編集作業を行い、作品に仕上げました。

今回、招聘しました大学生のうち男女各 2 名について訪日の報告書をご紹介します。

2010 年度日台青年映像交流事業訪日団

台湾芸術大学電影学系 3 年
翁雅雯



この「日台青年映像交流事業訪日団」に参加することができて、大変光栄に思っています。東京都墨田区を中心に映像を撮影することを目的として、3 グループ 12 名が日本を訪問しました。日本は初めてではありませんでしたが、今回のプログラムは私を期待と興奮でいっぱいにしてくれました。なぜならこれまでは慌ただしく買い物をするだけでしたが、今回は 10 日間の滞在を通じて日本の大学生と交流し、国際都市東京を撮影することができるというものだったからです。到着の翌日、墨田区役所を訪問し、墨田区観光協会の小川局長と友野健一さんから墨田区の発展の歴史について説明を受けました。台北の萬華区と同様、墨田区が早い時期から発展し、繁栄を遂げたことを知り、この歴史的息吹が息づく街に滞在できることに改めて期待で胸を膨らませました。

午後には墨田区観光協会にて、撮影に協力してくれる随行者、日本台湾学生会議のボランティア通訳者と、進行について話し合いました。随行は細田侑さんといい、私たちと同じ映像を専攻する学生です。墨田区の両国駅付近に住み、私たちが撮影する北斎通りに詳しく、訪問先や行程について様々なアドバイスをしてくれました。通訳は、早稲田、慶応、明治大学等の学生で、皆とても親切で積極的に協力してくれました。

スケジュールについて話し合った後、通訳の学生たちと一緒に、東京スカイツリーの向かいにあるインフォプラザでビデオを見、解説を聞きました。東京スカイツリーは日本の新しい電波塔で、2012 年春に完成する予定です。東京タワーに代わる新たなシンボルとして、展望台、商業スペース、オフィスが入った複合施設になるそうです。今回建設の過程を見ることができ本当に幸運でした。東京スカイツリーが完成したら再びここを訪れ、新しい墨田区を見てみたいと思いました。

夜は交流協会主催の歓迎会に参加しました。隅田川を進む屋形船の上で夕食をとるといって、得難い経験です。お刺身、天ぷら、ビールを楽しみな

がら、同じテーブルの日本人学生と、好きな映画、音楽、芸能人、そして日本と台湾の流行について話しました。船尾に出ると目の前にお台場の夜景が現れ、その美しさに皆興奮して、写真を撮り合いました。展望台の上から見るのとは感覚が大きく異なり、隅田川の上で風に吹かれながら眺める夜景はまた違う風情があります。また、この夕食会では、以前私たちの大学で講演してくださった榎田龍路先生にお会いすることができました。教室では時間的な制約もあって講義の内容を完全に理解することはできませんでしたが、それでも美術・美学について少なからず影響を受けています。その榎田先生に再会し、忘れられない夜になりました。

3日目は、下見と撮影です。朝、細田さん、通訳の平手さん、石井さんと待ち合わせ、両国駅に向かう北斎通りを歩きながら、撮影場所を選んでいきました。途中で葛飾北斎の生年月日が記載された立て札を見つけ、ちょうどその日が北斎の誕生日と知り、あまりの偶然に驚いてしまいました。両国駅付近にある江戸東京博物館は、江戸時代から第二次世界大戦に至るまでの東京の歴史と文化を紹介するもので、多くの精密な模型やフィギュアがあり、当時の街並が再現されています。大型の体験スペースもあり、昭和30年代の日本家屋に入ることができました。今ではほとんど見られない生活用品は、人々の記憶を感じさせる、貴重なものでした。生活文化を保存しようとする日本人の精神は素晴らしく、学ばなければいけないと思いました。

その後の数日間は秋の気候となり、ずっと雨が降っていたので、日中はほとんどホテル近辺で活動しました。雨が止んだ瞬間を狙って撮影し、ほぼ予定どおり撮影を進めることができましたが、光が少なく画面の明るさが足りなかったのが残念

です。今回のスケジュールの中で最も重要だったのは箱根での撮影です。葛飾北斎の富嶽三十六景のひとつ、「箱根湖畔」の実際の景色が、私たちの作品の最後の場面でした。日曜日、箱根に向かうため早起きをすると、しばらく見なかった太陽が出ていました。錦糸町から新宿へ行き、フリーパスを購入して小田急線で箱根湯本へ。しかし登山バスで芦ノ湖に着くと、空は曇り、撮影する予定だった富士山は完全に雲に隠れていたのです。それでも「箱根湖畔」の構図に似た場所を見つけ、撮影を終えることができました。その後、海賊船から見る芦ノ湖の景色を楽しみ、桃源台からロープウェイで早雲山へ向かいました。中でも印象深かったのが大涌谷です。黄色い地面が広がり、地表から絶えず白い蒸気が吹き出していました。小さい頃ここへ来て黒い温泉卵を食べたことを思い出しました。早雲山から乗った登山列車は急斜面を進み、香港の太平山のロープウェイを思わせました。最後に強羅に到着して、箱根の旅は終了しました。

訪日最後のスケジュールは、新百合ヶ丘の日本映画学校への訪問でした。ここは高名な今村昌平監督が創立した学校で、3年制の専門学校です。彼らのカリキュラムは私たちのものと似ていて、1年目はシナリオ、撮影、映画史、監督等の基礎を学びます。2年次から専門分野に分かれ、3年次は俳優科と共同で卒業作品を制作します。多くの優れた映画関係者が輩出されており、三池崇司監督もこの学校の卒業生です。撮影コースの学生と交流し、台湾で撮影した作品を上映して日本人の先生からアドバイスを頂くなど、貴重な時間を過ごすことができました。

交流協会、墨田区観光協会の皆さん、永遠に忘れることのできない日本での文化体験を、ありがとうございました。

2010 年度日台青年映像交流事業訪日団

世新大学広播電視電影系 4 年

蔡宜庭



日本へ出発するまでずっと事前準備をしていたので、日本へ行って撮影するという感覚はまったくありませんでした。出発当日 9 月 21 日の朝、空港に着いて初めて、これから違う国へ行って撮影するのだという緊張と興奮が湧きあがりました。撮影の経験は少なくありませんが、下見ができず、事前連絡もすべて人の助けを借りて行う撮影は初めてで、心の中は緊張と不安でいっぱいでした。台湾で撮影をする時は、事前に撮影先やインタビュー相手と細かな連絡を取りますが、それでも実際に赴けば予想どおり進むことはほとんどありません。今回は台湾ではなく、習慣や考え方の異なる日本での撮影ですからなおさらです。困難にぶつかるのではないかと、うまくコミュニケーションをとることができないのではないかと不安でしたが、日本で撮影するという事実徐々に適応していくことができました。

2 日目の朝、私たちは墨田区役所で説明を受け、また日本台湾学生会議のボランティア通訳者と対



面しました。通訳者の皆さんとは、お互い中国語も日本語も英語も流暢とはいえませんが、それでもとても楽しく交流することができました。驚いたのは、違う大学、違う学科から、中国語の学習に熱心なボランティアがこんなにも多く集まってくれたということです。一緒に昼食をとり、観光協会に行って撮影スケジュールについて話し合いました。その途中、今回の撮影テーマである東京スカイツリーを近くから目にすることができました。また、思いがけないことに、観光協会ではテレビ局のカメラマンとインタビュアーが私たちを待っていました。これまでマイクとカメラを持って人を訪ねたことはあっても、カメラを向けられたことはありません。とても新鮮な経験でしたが、やはり私はカメラの後ろに立つ方が慣れているようです。テレビ局のカメラマンは私たち 4 人の撮影に対する思いをカメラに収めてくれました。彼らと知り合えてよかったです。

3 日目には撮影を本格的に開始しました。日本はずっと雨だったので計画が乱れてしまいましたが、ボランティア通訳者の皆さんはとても親切に手伝ってくれました。この日は朝 7 時から撮影を開始し、かなり疲れましたが、それでも空が暗くなるまで撮り続けました。そんな私たちを受け止め、手伝えることはないかといつも気にかけてくれた彼らがいたからこそ、私たちは日本での撮影を順調に進めることができたのです。

4 日目は、墨田区観光協会の友野健一さんの案内で、すみだ環境ふれあい館、花屋、TOKYO 油田を訪ねました。私は日本語があまりできませんが、インタビューを受けてくれた方々の環境保護に対する努力、墨田区を愛する気持ちを感じました。また、友野さんはほとんど私たちのグループの一員となって、常にコミュニケーションと撮影に協力してくださいました。撮影面のみならず、

墨田区という土地、この土地で生活する人々とその日常生活について観察することができるよう、様々な場所に案内してくれたのです。交友関係が広い友野さんは、墨田区ならではのお店や友人の家に連れて行ってくれ、私は日本に溶け込んだかのように感じ、忘れ難い経験となりました。この日もテレビ局のカメラマンが私たちを撮影し、彼らと意見交換をすることができました。

インタビュー以外にも、日本の様々な伝統工芸を撮影しました。畳、羽子板、屏風、煎餅などを通じて、日本文化に対する理解を深めることができました。これらは町を歩き回る中で偶然見つけ、ボランティア通訳や友野さんの協力の下、撮影することができたものです。台湾と日本の撮影環境はかなり違うと感じます。日本人はオープンで、礼儀をもってしっかりとこちらの意図を伝えれば撮影を認めてくれました。この他にも、7日間の体験を通じて、日本の撮影環境は素晴らしく、撮影する者にとって良いところだと感じました。

最初の2日間と台湾に戻る最終日を除いて、スケジュールは朝から晩までびっしりと埋まっていました。墨田区の静かな住宅地、商店街、繁華街、日本式庭園や観光スポット…、10日の日程でしたが20日間分を見て回るといふ気持ちであちこち歩きました。撮影以外にも、夜は街歩きと食事をしないわけにはいきません。私たちの足跡は新宿、原宿、銀座、表参道、六本木に及び、限られた時間ではありましたが日本の様々な姿を見ることができました。毎日「行脚」したので、ホテルに戻るころには足の裏が爆発しそうでしたが、それでもその日撮影したものを保存してから休みました。

日本での撮影は、「人」と「文化」について感じることが沢山ありました。「人」は、今回出会った

すべての人々と、「偶然」出会った人々です。友野さんの友人の曾さん、和風店舗のおかみさん、昼職人とその奥さんなど、私たちに沢山の助けと温もりを下さいました。両国でちょうど開催されていた相撲、羽子板、江戸木箸、神社など、豊かに息づく日本の「文化」を感じることができました。天気を除いて人、事、物の全てが順調で、たまに道を間違えることはありましたが、それはすべて新たな驚きの発見となりました。私自身の視野を広げ、これまでになかった撮影の経験を積むことができ、そして墨田区が好きになりました。

東京スカイツリーが完成した暁には、再び墨田区を訪ねたいと思っています。今回は墨田区のあらゆる角度から東京スカイツリーを見ましたが、次回は東京スカイツリーの上から、2010年9月21日から30日まで私たちが歩き回った墨田区を眺めることができたらと思います。

2010年度日台青年映像交流事業訪日団

台湾芸術大学電影学系3年
江承祐



2010年夏、交流協会からの採用通知が届いたとき、とても興奮して飛び上がりました。映画学科で学ぶ私はこれまで何度も撮影の機会がありましたが、ほとんどが台北市か台北県、遠くても宜蘭県での撮影で、海外で撮影したことは一度もなかったもので、今回の「日台青年映像交流事業訪日団」への参加が決まり、期待で胸を膨らませました。日本での撮影を順調に進めるため、夏休みの間中何度もメンバーと話し合い、企画進行について修正や調整を繰り返し、その作業は出発する日まで続けました。

成田空港到着

到着後、交流協会東京本部の土田さんが私たちを出迎えてくれました。小型バスに乗ってホテルへ向かう中、交流協会の設立背景について詳しい説明を聞き、交流協会と日本に対する理解を深めました。

お好み焼きともんじゃ焼きを体験

到着日の晩の自由行動では新宿の繁華街へ行き、多くのお店を見て回り、最終的にはやはり日本での最初の食事は日本料理にしようと決めました。日本語がほとんど分からずメニューとにらめっこをしていましたが、知っている単語を頼りに料理を想像し、私と史英芹はお好み焼きを、翁雅雯と章家嘉はもんじゃ焼きを注文しました。店員さんが作り方をジェスチャーで教えてくれたので、美味しいお好み焼きを作ることが出来ました。もんじゃ焼きは難しく、あまり美味しく作ることができなかつたようです。自分でお好み焼きを作ったことはなかったので、本場日本での経験は興味深いものでした。

ボランティア通訳との対面

2日目は墨田区観光協会では説明を受け、日本台湾学生会議のボランティア通訳と対面しました。最初は中国語学科の学生が私たちと行動を共にしてくれるのかと思ったのですが、皆そうではなく、法学や政治学等を専攻する学生もいて、驚かされました。以前から中国語に興味があり、台湾での交流活動に参加した経験もあるそうで、私たちとの中国語での意思疎通にはまったく問題がなく、滞在中、様々な話をすることができました。

東京スカイツリーの説明を聞く

東京スカイツリーについては、その建設に至った背景、その機能、完成予定時期など、この現在建設中の電波塔について多くを知りました。ま

た、屋上から建設中の東京スカイツリーを見て、皆ビデオカメラやカメラで撮影しました。その日はちょうど中秋節で、東京スカイツリーの横に小さくて丸い月が浮かび、とても興味深い画面となりました。2012年の完成後また東京スカイツリーに来るかどうかと聞かれ、私は東京タワー、梅田SKYビル、台北101、新光三越など様々な高層ビルに行っているの、完成後の東京スカイツリー、そして2012年の墨田区をもう一度訪ねたいと答えました。

隅田川屋形船

2日目の晩、交流協会による屋形船での夕食会では、交流協会台北事務所の前・文化室長、馬場さんが拍手で迎えてくれました。これまで「屋形船」という言葉を聞いたことがなかったので、ボランティア通訳の学生に尋ねたのですが、彼ら自身も屋形船で食事をしたことがなく、全員にとって特別な体験となりました。食事の後は甲板に上がり、風に吹かれながら景色を眺めました。隅田川から観賞する中秋の名月はとても美しく、ボランティアの日本人学生とさまざまな話題について話し、互いの文化を知ることが出来ました。到着したお台場では、多くの屋形船が各々異なった色の電灯をつけ、川面に映る様子がとても美しく、10日間の日程の中で最も印象深い記憶となっています。

北斎通りでの撮影

撮影初日は雨が降ったため、まず北斎通りの周辺環境をよく観察し、撮影地と角度を決めることにしました。やがて葛飾北斎の生年月日「宝暦10年9月23日」が書かれた立て札を見つけました。その日はちょうど9月23日で、北斎の生まれた日にその出生地で撮影第一日目を迎えていることに大きな巡り合わせを感じ、とても不思議な気持ちになりました。その日は雨のため早めに作業を終

了しましたが、翌日以降は天気も良く、順調に撮影を進め、予定の時間内に予定の作業をすべて終えることができました。

今回撮影した墨田区は、新宿や渋谷のような繁華街と違い静かであつましく、日本人の日常生活の様子を観察することができました。子供の手を引く母親、公園を散歩する老人、幼稚園児たちが出かける姿など、繁華街ではこれらの光景を目にすることはできないでしょう。墨田区で過ごした9日間、その街並は今も鮮明に私の脳裏に残っています。ホテルの向かいのラーメン屋さん、そしてコンビニ店内の陳列の様子も、はっきりと覚えています。

箱根

私たちが書いた台本では、主人公は最後に富士山の見える湖畔に現れます。箱根の芦ノ湖での撮影は、到着するまでかなりの時間を費やしましたが、その後も遊覧船、ケーブルカー、登山列車などさまざまな交通機関を利用し、とても面白かったです。富士山を背景に晴天の芦ノ湖を撮影する予定でしたが、到着した芦ノ湖は曇りで、富士山は完全に雲に隠れていました。残念ながら美しい富士山を配することはできませんでしたが、それでも最終的に撮影した映像は情緒溢れるものとなりました。

日本へは過去に3回行ったことがあります、この10日間はとりわけ収穫が大きく、日本についてより多くを知ることができました。中国語学科の学生だと思っていたボランティア通訳の学生は、話してみると実はさまざまな学部の学生で、中国語に興味をもって勉強しているのだと知って驚き、中国語ができる日本人は少ないと思っていたそれまでの考えを大きく改めることになりました。私は今回の交流を通じて、日本語を勉強し、将来より多くの日本人と交流の機会を持ちたいと

思うようになりました。海外で撮影することができたことはもちろん特別な経験ですが、現地の学生たちと交流したことこそが最大の収穫だったと感じています。

2010年度日台青年映像交流訪日団

台南芸術大学音像動画研究所1年

張正杰



学期末の6月でとても忙しかった頃、先生の推薦で今回の訪日団に応募するための企画書を作成しました。東京都墨田区を中心に日本の社会・文化に関する短編映像を制作すると聞いても、何から手をつければいいのかわからず、何度も話し合いと練り直しを繰り返してようやく形になってきました。選考に通ったと知った時は、「こんなに短い期間で作品を完成させるのは大変だな」と考える理性的な自分もいましたが、この「日台青年映像交流訪日団」の活動に参加することができ、大変嬉しかったです。

東京のような大都市をひとりで歩くことは難しくありません。漢字表記は7割方理解することができ、片言の日本語と簡単な英語で意思疎通も可能です。半ば自由行動だったので、日本人の日常生活を体験することができました。例えば食券を買って食事をし、JRや地下鉄に乗って東京を横断し、駅前ではストリートパフォーマーを眺め、さらには夜の街を歩いていると知らない人が小声で話しかけてきたり。墨田区観光協会の方から錦糸町の状況を聞いていたので、翌日撮影があると言って断りました。台本の大幅な変更に加え、到着後の限られた時間で下見もしなければならなかった、日本でのスケジュールは大変きつく、

そして充実したものになりました。ホームステイの予定がなかったこともある意味では良かったことで、私たちの撮影スケジュールでは、もしホームステイをしたとしても安心して休むことはできなかったでしょう。

日本は映像の著作権に対する規制が厳格で、映像制作者にとっては保障されているといえますが、取材面からみれば煩雑で、事前に許可をとらなければなりません。撮影日程は緊迫し、翌日の撮影に備えて深夜まで話し合いが続き、日本滞在中に6時間眠れた日はありません。随行の小林さんは、雨の日には車で私たちを下見と撮影に連れて行ってくれるなど、小林さんの協力があって初めて撮影を順調に進めることができました。10日間の半分以上は雨、台本上と実際の天気が異なってしまったのですが、撮影できる時間は限られていたので、これらの細かい問題を解決するため連日悩みました。

今回の活動が一般的な交流と異なるのは、日本で撮影する、そして直接日本人と接するという点です。例えば、到着日の夜に街の風景を撮影していると、映画の専門学校に通っているという学生が話しかけてきたのですが、残念なことに言葉の問題でうまくコミュニケーションをとることができませんでした。その後の撮影ではボランティア通訳による協力の重要性を痛感しました。例えば、すみだ郷土文化資料館では、通訳者がいたおかげで撮影許可に関する考え方の違いを知ることができ、また、不許可なものに対しての日本人の厳格な態度も経験しました。矢田製帽の矢田さんは、必要な場面の撮影に協力してくれただけでなく、帽子の制作過程について丁寧に教えてくれました。Café & Bar SORAの店主は格好良く、そして少女の心を持つ女性でした。すべて初めての直接交流で、深く印象に残る経験でした。

日本台湾学生会議のボランティア通訳とのやりとりからは、台湾と日本の企業の違いを知りました。出会った大学4年生たちはちょうど就職問題にぶつかっており、日本では大学4年で既に仕事を探し実習を受けるとのことでした。台湾では、卒業後に仕事を探し始めるのが普通です。これは文化の違いなのですが、おそらく日本は江戸時代の藩主と家臣の関係のように、企業は人材育成を重視して基礎から教え育てるのではないか、短期的な観点から即戦力を欲しがるとある台湾企業はこの点を学ぶべきではないかと思いました。

この10日間で最も多く見た映像は、深夜番組とテレビコマーシャルでした。深夜しかテレビをつけることができなかったからです。テレビ番組には文化・思想が見え、また日本独特のユーモアがありました。コマーシャルは、内容が特にならない表現方法でも、効果的に観衆を商品に惹きつけるものでした。今敏監督のインタビュー番組の再放送を見たときは、自分はいまアニメの輸出大国日本にいるのだと感じました。日本アニメ界の代表的人物である今敏監督と川本喜八郎監督が今年相次いで亡くなられたのは、大変残念なことです。

撮影した中で最も印象に残っているのは、最終日です。その日は3時間睡眠で、朝5時に起床して東京スカイツリー付近の町の風景を撮影しに行きました。日本の町が一番汚れている時間帯で、路上にはゴミが捨てられていましたが、しかしそれでも静まりかえった町はとても気持ちのいいものでした。猫さえ、朝の新鮮な空気を吸いに外へ出て来ました。彼らはごみの周りに好んで出没するようでしたが。撮影を進めながらも、数時間後には飛行機に乗って台湾へ戻らなければならず、冷たい空気と町の静けさの中で、この10日間に起きたこと、出会った人々を思い返していました。まるで長い橋を渡っているかのようで、ゆっ

くりと時間が過ぎていきました。2時間ほど撮影したところで小雨が降りだし、カメラの電池もちょうど切れてしまい、寂しい気持ちに襲われました。それはあのかわいい女の子が笑顔でさよならと言ったからなのか、それとも台湾に戻った後の忙しい編集作業を想像したからなのか分かりませんが、とても美しい記憶となっています。

台湾と日本の関係はとても密接で、台湾には大量の日本文化、例えばドラマ、マンガ・アニメ、バラエティー番組などが輸入されています。台湾に戻ったころ、ちょうど台湾でUNIQLOが開店し、多くの人が押し寄せました。また、ドラマの影響か、台湾人男性は日本人女性に対して特別な思いを持っています。日本に着いた時は何もかもが珍しく、面白く、町ですれ違う日本の女性は皆

綺麗だと感じました。しかし、これは知らない文化に対する過度の憧れに過ぎないのだと、だんだん自覚するようになりました。また、日本台湾学生会議のボランティア通訳と話をするうちに、彼らの台湾に対する興味は台湾の哈日族が日本に寄せる関心に負けないものであり、皆違う文化に対して興味があるのだと感じました。各々の文化には長所があり、例えば日本人は物事に対する態度がまじめで、人に対して礼儀正しく、計画を立てるにも細かいところまで気を遣います。一方、私や他のメンバーたちには、率直に感情を伝え、情の入った思考をする台湾人の長所があります。お互いの長所は吸収すべきでしょう。私にとって今回の交流は、日本を知ると同時に台湾の魅力に気付く、とても有意義なものとなりました。